



夕張岳の自然を憂う

梅沢 俊

梅沢 俊
(うめざわ しゅん)

1945年北海道に生る。
1969年北海道大学農学部農業
生物学科卒。
現在、植物写真家。著書に、
「北海道・花の散歩道」(正、
続)、「日本の名峰3—日高・
夕張・増毛」—「花風景・北
海道」他。

■部外者からみた自然保護協会

「夕張岳が危い」との危機感から気軽に執筆を引き受けたものの、今、あまり気のすすまぬまま書き始めている。自分の思いが的確に表現できぬもどかしさも理由のひとつだが、いくら声高に夕張岳の自

然の大切さ、貴重さをとなえ、どんなにスキー場開発反対を叫べばとも、破壊を止める力になり得ないのではないかとの諦観の念が消えない。自然保護協会誌で夕張岳の自然を憂うのは「赤旗」に自民党批判を載せるがごとく、読者にこそ共感を得ても、

なかなか大きな力とは成り得ないのではないだろうか。たとえ正論といえど、機関紙の限界と言えば言えるのではないだろうか。

私は自然保護協会員ではない。この原稿執筆を機に始めて協会とコンタクトを持った人間である。私の勉強不足、無知をさらすようだが、本題に入る前にひと言、ふた言お許し願いたい。協会員以外にも自然(保護)に関心を持つ人は多いと思われ、その人たちも同じ思いをしているのではないだろうか。

まず、この「北海道の自然」は協会員しか入手できないのだろうか。気にかけて探したこともないのだが、私は一般書店で見掛けた記憶はない。目次を眺めただけでワクワク胸躍するような素晴らしい内容の会誌なので、より多くの人に読まれるべきだと考えるが、いかかであろうか。そう言えば、新聞での紹介記事も目にした記憶はないなあ。それから些細なことだが一般の人は協会と連合の区別がよく分からず、同一の自然保護団体との認識しか持っていないのではないだろうか。どちらかに不祥事でもあれば、「同じ穴のムジナ」的な視線を浴びることになるが、まあ仕方ないことか。

■近ごろの夕張岳

私が夕張岳に始めて足を運んだのは一九七二年六月だから一七年も前のことである。以後年に二〜三回は通い続けているから、もう五〇回ほどにもなるうか。もちろん撮影が入山の主たる目的だが、山も花も撮り尽したようでいて、登る度に再びフィルムを浪費してしまふ、奥の深い不思議な山との念を深くしている昨今である。

一七年も通い詰めていると、山の変わり様をいくらか感じる時がある。

まず、登山者が増えたという印象を持っている。

確固たるデーターの持ち合わせはなく、あくまでも印象であるが、特に御年配の登山者が目につく。御夫婦で登る姿も以前はあまり見かけなかったようである。中高年のグループ登山も流行のようで、休日には数パーティは確実に登っている。そして、これら登山者に共通することは植物をよく知っているということである。専門家ほどとまでは行かないが、傍らで聞いていて嬉しくなるほど事前の勉強をされている方が多い。たまたま盗掘跡などを見付けようものなら、一様に怒りを現わにすることも大きな特徴である。

今、夕張岳において高山植物の盗掘は以前のように露骨な形では見られない。特に休日は出来心的な例しか目にしていない。監視人が居ないながら、相互監視の効果と見てよいのではないだろうか。休日の夕張岳は熟年パワリーに守られているとの印象を持つこのごろである。

ファミリーの登山者もよく目にするが、こちらは親次第だ。大切さも何も知らないでお花畑を走り回り、花を摘み取る子供たち。昨年は雨の少い夏だったので、干上がった湿原のお花畑で弁当を広げていた家族が何組も見られた。目に余る人々には声をかけるが、こちらが直接の被害者ではないからやりにくい。腕章をかけた監視人がいればと切に思う時である。登山のモラルは、読みたくなるようなパンフレットを登山口に置いて、さり気なく知ってもらうのも一つの方法であろう。

露骨な盗掘は以前に比べ少なくなったと書いたが、なくなつたわけではない。むしろ人目を避けて手口が巧妙になつたということか。

もう一〇年以上も前のことだが、湿原のお花畑に限って生えているヒメシヤクナゲを日曜日堂々と掘

り、当時大夕張営林署の江澤弘志氏にこつてりと油をしぼられて二人組を見たことがある。状況からして、悪事を働いている認識が無かつたのではないかと思うが、さすがに今なら通用はしまし。たまたま江澤氏が登つていたので御用となつたが、そうでなければどうなつたことやら。

昨今は知らぬ間に無くなつていく植物が多い。ツガザクラ類は、さすが美しい所は盗り尽したと見えて、ここ数年は変りがないが、リシリリンドウは半分以下に減つてしまった。夕張岳に生き残れるかどうか、ギリギリの線であろう。リシリリンドウの一品種ウスイロリシリリンドウは夕張岳から姿を消して久しい。

登山者が増えるにつれ、踏みつけによる植生の荒廃が目立つようになってきた。これは前岳湿原と蛇紋岩の崩壊地で顕著である。

前岳湿原では、登山者がぬかるみと化した道避け、次つぎと新たな踏み跡をつくっていくので早急に木道の敷設が望まれていたが、この春資材が荷上げされ、夏には完成の予定と聞く。木道は、本来自然とは相入れないものであるが、小さな湿原は踏み跡だらけになつてしまつたところであつた。

蛇紋岩崩壊地での踏みつけは、主に花見の登山者によるものである。蛇紋岩崩壊地は一見灰色の裸地のように見えるが、結構多くの植物が生きているのである。その大部分は固有種などの貴重な植物である。ユウバリコザクラなど一見して識別できる花は別として、シンバキスミレなどは驚くほど小さな花であり、大きくなるホンバトウキ、シロウマアサツキなどでも芽生えなどはまず目に入らない。気を付けながら歩いていても、知らぬ間に罪をおかしている場合が多い。こちらでも何とか手を打たねばならな

い。安易な立入禁止策では解決にならない。夕張岳登山の第一の魅力は奪うことになつてしまふ。知恵の出どころでもあろう。

さらに登山者が増えれば、トイレ、休憩地、幕営地などの問題も深刻になつてこよう。

■スキー場が直撃する植物たち

以上、夕張岳の現状について述べてきたが、スキー場ができることとの様な影響が考えられるか、紙面の都合等でここでは直撃される主な植物に限つて少々触れておこう。

①ウスバトリカブト 夕張岳の固有植物の蔭に隠れて注目されることが少なかったが、基準標本の産地は夕張岳である。スキー場による直撃は必至である。エゾトリカブトの一変種と考えられている。

②フギレクスミレ ほとんど夕張山地にしか分布せず、生息地にはリフトが架けられ、下はスキーコースとなる予定。

③カノコソウ ハルオミナエシとも呼ばれるうすい赤味を帯びる花は、この花を築しみに頑張る人も多いほどの人気があるのにスキー場に直撃される。

④テングクワガタ 小さな花なので、気が付かずに通過する人がほとんどだ。アセスの調査でもちゃんと見付けたのだろうか。

⑤アリドウシランとコイチヨウラン スキー場造成のために、樹林が伐採されると真先に姿を消す草である。

⑥その他 シラネアオイ、ハクセンナズナ、キソチドリ、ツバメオモトなども登山道の傍を飾ってくれる花ばなで、スキーコースの下敷となつてしまう場所である。

■本文中で紹介されている夕張岳の花々は、グラビアページにて掲載してあります。



蛇紋岩崩壊地周辺のお花畑。多種多様な花がひしめきあって咲く

夕張岳の自然を憂う

受難の花たち

無神経な登山者によって踏みつけられる花やスキー場開発によって直撃を受ける花の一部を紹介する。ここに載せなかった花とて安泰というわけではない。詳細は本文参照願いたい。



フギレキスミレ＝憩沢、すなわちロマンスリフトの下敷となる所で見られ、様々なタイプの花がある。



ウスイロリシリンドウ＝姿を消して8年の月日が流れた



ガマ岩のお花畑＝不安定な岩礫上に発達しているため、土砂の移動で破壊されやすい。



テングクワガタ＝望岳岳の先の道端に咲くが、小さくて見落とし勝ちだ。



カノコソウ＝芦別岳が望まれる望岳台にひっそりと咲いている。



ウスバトリカブト＝エゾトリカブトの変種で、望岳台の手前あたりで見られる。夕張岳が基準標本の産地。



ヒョウタン沼＝沼周辺の湿地がよく踏み荒らされる。乾燥すればなお更だ。